

# 小池澄夫の仕事——その足跡をたどるための覚書

中畑 正志

「小池哲学」を論ぜよ——これが安彦さんからの注文である。

小池澄夫の仕事に「小池哲学」という言葉で呼ぶのは、あまり適切とは思われない。だが、安彦さんの意図は、思い出や惜別の辞を述べるのではなく、小池の仕事の哲学的な意味や重要性を説明し論じてほしいということだろう。たしかに、ともに古代哲学研究に携わり小池から多くを学んだ者としてなしうる最良の追悼は、故人の思い出を語ることよりも、小池の遺した仕事を読み直し、その意義を考え、それに応答することであろう。それならば、とにかく小池の仕事を哲学として論じることはなるだろう。

もともと、私自身がこのような課題に応えるのにふさわしいかどうかは疑わしい。少なくとも小池のよき理解者だという自信はない。彼の論文を議論するような機会のたびに私が小池に述べたことの多くは、その主張や解釈に対する疑問や異論だったと思う。だが他方で、小池の仕事が十分に理解されていないことに以前からある種の憤りも感じていた。だから、このような機会を与えていただいたことに感謝しなければならない。

とはいえ、小池の仕事の全貌を扱う準備と余裕がいまの私にはない。そのためここでの考察は、「覚書」と題したように、次のような限定的な性格のものにならざるをえなかった。

第一に、小池が遺した仕事は、翻訳を除けば、ほとんどすべてがプラトンに焦点を当てたものだ。それは大きく二つのグループに分けることができる。一つはプラトンの中期から後期の作品でのイデア論を考察課題としたもの、もう一つは『国家』を中心としたプラトンのミーメーシス論を主題としたものである。この二つは、像ないしは写しと模倣という問題圏を媒介として連絡していると私は理解しているが、相対的には独立している<sup>1</sup>。また、前者のグループの論考のほとんどは、小池の著書『イデアへの途』に収録されており、後者のグループに属する論考は未だまとめられていない。そこで、

---

1. 『イデアへの途』の「あとがき」に述べられたこの本の成立過程から、小池自身もそのように考えていたことがわかる。

後者の論考群の考察は、それらの集成の作業とともにまた別の機会を期すことにして、ここでは比較的入手しやすい状態にある前者の論考群について、思い切って論点を絞ってその仕事を振り返ることを試みる。

第二に、以下での回顧は、小池の提示したある論点に対する私なりのバイアスがかかった考察を含んでいるので、小池の仕事に対する過不足のない評価にはほど遠いといわねばならない。小池の熱心な読者には大いに不満が残るだろう。それでも、小池ならこうした応接を許してくれるだろうという確信に近い想いが私にはある。ともかくこの「覚書」が、今後多くの人々が小池の仕事を議論するために、何らかの手がかりとなることを願う。

## I

1 『アイデアへの途』の「あとがき」のなかで、小池は「第五章の二節から第七章まではもともとは連続していて、本書に取り柄があるとすればここだけであろう」と述べ、また「内発的に書かれた論文はこれ〔この本の第七章〕が最後」とも述懐している。小池特有の過度の謙遜（というより照れ隠し）がここにも見てとれるが、たしかに言及された部分がこの書の中核を構成するといつてよい。ここでは、プラトンの解釈としてもそれ自体としても小池に独自の重要な思考が展開されている。

考察の中心的主題となっているのは、アイデア論における範型としてのアイデアとその似像との関係である。実際、小池が「取り柄」とよぶ部分が始まる第五章の二節は、「似像と範型——アナムネーシスの場面——」という表題が付されている。そしてこの第五章での「アイデア・原範型と範例とは決して混同されないこと、またアイデア・原範型があらゆる事象に似像のかたちで浸透しているものであること」の再確認（第六章 p.175）から第六章は展開される。そのように確認されるアイデア論との関係のもとでプラトンの後期対話篇に現われる「分割法」を理解し、同時にアイデア論的文脈を十分に考慮せずある種の形式的方法として解する分割法の支配的な解釈を論駁するのがこの章である。そして第七章は、その冒頭の言葉がはっきりと告げるように（p.181）、まさにこの「範型—似像」という概念あるいは思考法それ自体の問題性を摘出し、「像性を類似性から分離すること」を課題としたものである。なるほど小池の言うように、これらの章での思考はあきらかに連続している。

2 アイデア論におけるアイデアと感覚的事象との関係は、範型と似像の関係として理解されるべきである。——これは、小池の師である藤澤令夫によって、プラトンのテキストにもとづいて明晰にかつ説得的に主張された論点である。プラトン自身はアイデアと感覚知覚される事象の関係を範型—似像関係

を表わす語彙だけでなく、「何かが特定のアイデアを分有する」というように分有 (μετέχειν) という用語によっても記述している。しかし藤澤は、この「分有」用語による記述方式はむしろアイデア論の基本的な考え方を誤解させる危険性をはらんでいたこと、そしてプラトン自身もその危険性に気づき最終的にはアイデア論を範型—似像用語を使用して記述し理解していたことを論証した。小池のアイデア論理解も藤澤のこの見解の強い影響下にあることは、小池自身が認めるところだ。

だが、第五章二節での議論は、そのようなアイデア論理解に小池独自の重要な洞察を付け加えている。すなわち、アイデア論におけるこの範型と似像の関係がエロース的な契機と本質的にかかわっているということだ。

この節で分析されているのは、『パイドン』での想起説である。小池によれば、何か(A)を見て別の何か(B)を思い浮かべるという想起の経験において、想起の機縁(A)と想起の対象(B)との関係は範型と似像の関係として理解される。しかしこの関係は、想起する主体のあり方と無関係に、たんに二つの項の間に「客観的に」成立しているものではない。たとえば、両者が「似ている」ということが通常の意味で解されるならその関係は「客観的」に成立していると解されるが<sup>2</sup>、範型と似像の関係はそのようなものではない。小池は「ここでのポイントは、「似ている」ということが想起の契機になるということではなく、「像としてみることに」は「欠けたことがある」という認知が含まれているということである」と主張する。想起とは「この「欠損の意識」にささえられ」た経験である。

物体の含みもつ等しさ(A)と等しさそのもの(B)の区別は、われわれのエロース的指向に即応するところの、〈範型=完全なもの〉と〈似像=欠損をこうむったもの〉とのそれである(第五章 p. 142)。

---

2. もちろん、類似関係をどのように理解するのかは、それ自体哲学的に重要な論題である。類似性についてはその相対的性格を指摘する N. Goodman の議論 (Goodman 1955; 1968) などが知られているが、小池の議論との関連でより注目すべきは渡辺慧の考察 (渡辺 1978) だろう。渡辺は、類似性を共通の述語の数で計ることにすれば「すべての二つの物件は同じ度合いの類似性をもっている」こと、にもかかわらずわれわれが類似性の度合いを認識するのは、われわれにとっての重要性や有益性という価値観を反映していることなどを主張したが、この渡辺の分析に深く共感したのが藤澤であった (藤澤 & 渡辺 1979)。藤澤は、類似性の認識が価値の認識を含むという考え方にプラトンのアイデア論および善のアイデアの構想との強い親近性を認めたのだ。したがってアイデア論における類似関係それ自体も本来はさらに分析を必要とするが、ここでは小池の議論の線にしたがって理解して話を進める。

ただし小池は、このような範型と似像という関係が明らかになるのはあくまでも想起の終了の時点においてであり、その起点において与えられるのは（範型の存在を前提としない）ある感覺的認知の不充足であることも、繰り返して強調している。

3 この小池の議論は、いくつかの点で注目に値する。

まず第一の点は、以上の考察がプラトンのイデア論に対する小池の最も根本的な洞察を告げているということだ。小池は、イデア＝原範型という存在がわれわれの生のあり方と切り離されたものではなく、むしろそのような関わりを抜きにしては空疎な理論であると考えている（第八章「洞窟の世界」などで展開されるいわゆる二世界説への批判も、そのような洞察にもとづくといえるだろう）。イデアと感覺される事象と間に成立する範型—似像関係も、一見したところ感覺知覚する主体とは無関係に成立するように思われるが、小池にしたがうなら、実は（広い意味での）探究あるいは知への希求という営みと本質的にかかわるものと理解されねばならない。範型—似像関係を支えるのは、「何か欠けている」という非充足性の認知とそれが含みもつより充実した何かへの指向である。それが小池の言う範型—似像関係の「エロスの指向への即応」である。

すでに藤澤は、イデア論がよく生きることの希求を根本的動機として構想されたものであることを繰り返し指摘してきた。小池の解釈も、このような藤澤の理解を継承していると言ってよい（藤澤が第五章のもととなった論文について、「あれは後半がいい」という趣旨のこと——つまりまさにいま取りあげている第五章第二節以後に対する評価——を語っていたのを私は記憶している）。しかし、小池がそのようなイデア論の基本的理解をさらに深く掘り下げて考察していることも強調されねばならない。範型—似像関係の成立と希求的・探究的な契機の本質的にかかわりを、小池のように明確にかつテキストにもとづいて主張した者を、私は先にも後にも知らない。

第二の点は、いっそう慎重な考察を要求する。なぜなら、プラトンの解釈上の具体的問題へと立ち入ると同時に、哲学的により深刻な問題へと道を開くからだ。プラトンの解釈上の問題とは、『パイドン』での想起説の提示のなかに含まれる次のような記述に関連する。

ほかならぬそれら等しい事物——それはかの〈等しさ〉そのものとは別種の存在であるのに——  
を手がかりとして、君は〈等しさ〉そのものの知識を心に抱き、把握したわけなのだね。

まったくおっしゃるとおりです。

その場合、それは手がかりとなったいろいろのものと、似ているか似ていないかのどちらかではないのかね。

たしかに。

ただしその点はどちらでもさしつかえない。肝心なのは、君が何かを見て、それも見たことが機縁となって別の何かを心に抱くのであるかぎり、両者が似ている似ていないにかかわりなく、必ずそこに想起が行われたのでなければならないということだ。（『パイドン』74c-d）

想起の機縁となる対象と想起される対象とが「似ている」か「似ていない」かは重要でないといった趣旨のことは、少し先の議論でも復習されている。

何かを見たり、聞いたり、その他の感覚で知覚することによって、そこからすでに忘れてしまっていたあるもの——似ている似ていないにかかわらず、もともと何らかの関係のあったほかのもの——を認識すること自体は「可能であることがすでに明らかとなった」。（同書76a）

こうした記述が示唆するのは、想起の機縁となるものと想起される対象との間に類似関係が成立することが想起の必要条件とはならない、ということだ。だが、この類似性への留保には、少し人とまどわせるところがある。というのも、ことアイデアの想起に関しては、想起の対象となるアイデアとその想起の機縁となる感覚的事象とが類似関係にあると一般的には考えられているからだ。じっさい、『パイドン』においてアイデアと感覚対象の事例となっている〈等しさそのもの〉（＝等のアイデア）と等しい事物との間に等しさに関して何らかの類似性が成立していると解するのは不合理には思われない。プラトンの他のいくつかの具体的な記述も、そのような理解を支持するようにみえる。たとえば、等のアイデアと（感覚される）等しい事象との関係は、類似したものからの想起の場合を取りあげた文脈で議論されている。さらに、両者の関係は、「いま眼にしているこのものは、存在するある別のものと同じようなあり方でありたいと望んではいるが、しかし欠けるところがあり、かのもと同様のあり方であることができない。・・・それは似てはいる（*προσσεικέναι*）が欠けているところがある」（74d-e）と表現されている。それゆえ少なくない研究者が、想起における類似性への留保の表明を、類似性の成立を認めたくえで何らかの但し書きの追加であると考えてきた。たとえば、感覚される等しさは、ある人にとって等しく、ある人にとっては等しくないものとして現われるという性格をもつため、類似性への留保は、感覚される等しさは、ある人にとっては等しくは見えないという事態が成立すること、つまり感覚される等しさの相対的性格を示していると解する<sup>3</sup>。

小池は、引用箇所のような『パイドン』の具体的な記述について直接に言及をしていない。またアイデアと感覚対象との類似性という問題それ自体については、この第五章では、「似ている」という

---

3. Hackforth 1955.

ことが想起の契機になるということではないと主張するだけで、それ以上の分析を展開していない。しかし小池の基本的な考え方はすでに十分に読み取ることができる。それは、この類似性への留保を真剣に受け取るものだ。一般的に想起の機縁と想起の対象との関係においても、そしてその一例である感覚される事象とそこから想起されるアイデアとの関係にとっても、類似性の成立は必要条件ではないのだ。これは第七章での、アイデア論における範型と像の関係から類似性を払拭すべしという——のちに見るように小池が強く固執した——主張を予告している。

4 続く第六章は、プラトンの分割法をめぐる考察である。プラトンの後期対話篇においては、「分割」(diairesis)と呼ばれる手続きが一つの探究方法として提示されているように見える。小池はこの「分割法」が、類似あるいは同質なもののなかに差異を見出すことを基本とした方法と理解する。さらに、類似あるいは同質性の認識とそこからの差異化というこの思考の運動は、『ソピステス』『ポリテュコス』において、最終的に真偽の分割、あるいは知と非知との選別というその分割そのものの根拠へと遡源する行程をたどる。小池によれば、このような場面においては、アイデア論が根底にあってはじめて分割を可能とする差異が透かし出される。小池はさらにこのようなアイデア論的な前提を世界理解の全体にまで及ぼす。すなわち、分割法とは第五章で確認されたアイデア—範型説と想起説とに密接に結びついて成立する方法なのだ。「分割法の根本前提がアイデア論にあり」「分割法は(弱い)想起に始まり、この想起をより鮮明にする方法」なのである。こうした理解はつぎのように集約される。

分割法とは、『ピレボス』(16D sqq.)の「音韻の形成」(mousike)と「音韻組織の発見」(grammatike)とにそのモデルが見られるように、最終的にはアイデア相互の連結と排除の関係を吟味することにより、似像の束に解体した現象に秩序と構造を発見し構成する仕事であるといえよう(第六章 p.175)。

この小池の見立ては、きわめて野心的なものであるだけに、丁寧な再検討を要求する論点を多く含んでいる。いま、その詳細に立ち入ることはできないが、以下での第七章の検討を通じて、そのなかの一つの重要な論点を取りあげることになる。

## II

5 第七章のもととなった論文において、小池はこうした一連の考察を集約し、そこからさらに重要な展開をおこなった。この章での考察は、疑いなく、小池が到達した重要な達成である。小池自身この論文に個人的に強い想いを抱いていたことは、この書の「あとがき」などから窺えるが、さらに小池が京都大学文学部の同窓会誌「以文」に寄せた藤澤の追悼文を、この論文についての藤澤の反応をまじえて綴っていることから知る事ができる。

私にも個人的な思い出がある。第七章の中心的論点へと案内するために、そのことから話を始めよう。小池が「あとがき」で語っているあるエピソードの現場に私もたまたま立ち会うことができた。1986年（だったと思う）の夏休みのある日、小池に連れられて藤澤の信州の別荘を訪れたときのことだ。その前年の西洋古典学会で小池が発表した論文について藤澤と小池の間で議論しようということになり、まだ博士課程の院生の私にもレフェリーになれと（もちろん冗談で）藤澤から声がかかった。具体的なやりとりの記憶は曖昧だが、範型—似像関係から類似関係を脱色しようとする小池の試みに対して、藤澤はかなり懐疑的だった。私はといえば、小池の論文の意義が当時まだはっきりと理解できないでいたというのが正直なところだ。ただし、この論文の英文要旨のなかで使われた一つの言葉が気になっていた。“of-ness”という言葉だ。小池はこのことばをアイデアと感覚される事象との関係を論ずるのに使用したのだが、私は以前にこの耳慣れない言葉の印象的な用例に出会っていた。D.Kaplanの論文“Quantifying in”<sup>4</sup>である。

この論文が発表されたのは1969年であるが、Kripke, Putnam, Donnellanらの提示する新しい指示の理論がその後注目を浴びるなかで、その陣営に属する先駆的業績とみられうるこの論文はすでに一種の古典ともなっていた。私は修士論文でプラトンの言語哲学を論じたこともあり、この新しい動向に関心を抱いていたが、なかでもこのKaplanの論文を興味深く読んだ。そのなかでKaplanは名前（name）の記述的内容（descriptive content）と生成的性格（generic character）とを区別し、前者は使用者に依存しないが後者は名前に伴う使用者の信念に随伴することを主張した。Kaplanはこの区別をわかりやすく説明するために、名前にかわって画像（picture）を例にとり、次のような説明を与えている。名前の記述的内容は画像が保持するある人物との類似性に、名前の生成的性格は画像が生み出される因果的過程に比せられる。画像がある人の（of）画像（肖像など）であるためには、画像制作に結びつく因果連鎖においてその人が（その画像の対象となることを含む）有意義な貢献を行わなければならない。

画像の生成的性格と記述内容とが相違することは、同一の記述内容をもつ画像（たとえば瓜二つの双子のそれぞれの写實的肖像）が異なった人物の（of）画像であるという事実に見てとることがで

---

4. Kaplan 1969.

きる。Kaplanはこのような対比を、ある人物との類似性 (resemblance) とある人物の画像であること (of-ness) との区別として概念化したのだ。

もう少し例解を付け加えよう。ある絵に描かれた人物(x)の容姿が特定の人(y)によく似ていたとしても、その類似性はその絵がその人(y)の肖像であるということを保証するものではない。「モナリザ」に描かれた女性とそっくりの女性がいま生きていたとしても、あのダビンチの絵がその女性をモデルとした像であることは不可能である。また逆に、肖像画が必ずしもそのモデルに (通常の意味で) 似ているわけではなく、モデルとなった人物におよそ似ていないとしても、その人をモデルにして制作された作品であれば、その人物の像としての性格を得ることができる。ピカソの「泣く女」は、モデルとなった女性には (通常の意味では) 似ていないだろうが、やはりその女性の像なのだ。したがって、絵の内容、つまりそれがどのような色と形から構成されているのか、という絵画を構成する内的性質からは、それが何かにどんなに似ていたとしても、何の像であるのを決定することはできないのである<sup>5</sup>。

Kaplanによる記述内容と生成的性格との区別が、小池が試みている類似性と像性との分離に密接に関係することはあきらかであろう。私は別荘での藤澤と小池の対論の折に、小池にこのKaplanの論文のことや、この論文でのof-nessと小池のof-nessとの関係などを尋ね、少なくとも小池もこの論文を読んでいたことを確認した。だが、残念なことに、それ以上に私がどのような話をし小池がどのように応答したのか、ということになるとほとんど記憶にない。それでも、小池が論じようとしたことの輪郭と重要性を理解するようになったのは、この対論に立ち会いKaplanの論文を思い出したことからである。

6 小池の考察に戻ろう。以上見られた事情を踏まえるなら範型—似像関係をめぐって小池が指摘する「思考の罨」の存在も理解しやすいものとなるだろう。アイデアと感覚される事象との関係を範型と似像との関係として理解するとき、われわれの思考はアイデアをめぐる絵画的比喻に嵌りがちである。このような比喻に依拠するなら、あるアイデアとそれに対応する感覚的事象は類似したものとして表象される。そしてその類似性は、ちょうどKaplanのいう名前の記述的意味が使用者から独立に確定できるように、それにかかわる主体のあり方からは独立の、いわゆる客観的な関係として解される。その結果、範型と似像との関係は、小池の言葉を使えば「エロスの指向」とは無関係に成立するものと考えられるに至るのだ。しかし、何かの像であるということは、それとは異なる。「像は「客観的な」

---

5. これは私がアリストテレスのファンタシアーの分析における絵画と像との区別を論じるのに使用した例である。詳しくは中畑 2011a 第IV章を参照。

物の世界には存在しない。むしろ、それはわれわれの生ける世界の最も基礎的なあり方のひとつである」。この論文の注に、小池はさりげなくこの根本的な洞察を記している。

小池によれば、プラトンがこの『ソピステス』で敢行したのは、まさにこの絵画的比喩の誘惑を断ち切ることであり、アイデアと感覚的事象との関係から類似性の契機を剥奪し、徹底して原型あるいはモデルと像との関係として理解しようとしたことだったのである。

7 このような小池の主張は、哲学的にも哲学史的にも多くのことを考えさせる。哲学史的にみたととき、たとえば、プロティノスをはじめとした新プラトン主義者の議論において、一者を頂点とする実在の階層的關係が像や類似といったタームを用いて記述されていることが想起されるだろう。もちろん彼らには像性と類似性とを分離しようという指向はなかった。小池的な見方にしたがうなら、彼らの世界像は、類似性と像性の癒着のうえに成立したものと評されるかもしれない。しかしまず、プラトンの後期思想の理解にとって小池の主張がもつ意義を確認しなければならない。

小池の主張するように像性と類似性とを断絶することがプラトンによって遂行されているとすれば、それはたしかに『パルメニデス』でのアイデア論批判に対する明確な応答となる。同対話篇でのアイデア論批判、とりわけそのなかで最も興味深い批判の一つ (132c-133a) <sup>6</sup>は、アイデア論の主張する範型と似像の關係が含むと通常は考えられる類似關係に依拠していたからだ。その批判は、ほぼ次のような命題から構成されている (132d-e)。

- (1) ある何かが特定のアイデアに似ているなら、そのアイデアもその何かに似ている。
- (2) 互いに相似るものは、ともに同じ一つの何か<sup>7</sup>を分有している。
- (3) 両者に分有されている当のものはアイデアであり、もう一つ別のアイデアである。

こうして、アイデア (たとえば美そのもの) とそれを分有するもの (美しい花) は、もう一つの同性質のアイデア (美そのもの 2) を分有するという不合理が生じることになる。そして同様の前提を繰り返し適用すれば無限背進を構成できる。

以上の批判に対して、アイデア論を擁護する論者の多くは、命題(1)に問題点 (プラトンのアイデア論との背馳) を見出してきた。範型と似像の關係は通常の意味での類似關係ではなく、非対称的類似關係であるというのだ。

---

6. アイデア論に対するいくつかの批判のなかでも、当該箇所の批判において検討されるアイデア論の理解に登場人物の若いソクラテスがある種の自信を抱いていた——そう解されるような口調で、プラトンは若いソクラテスに語らせている。

7. これは 132e1 εἶδος を削除した訳である。この言葉をめぐる問題については、以下の議論で言及する。

しかし、このような仕方ではアイデア論を擁護する伝統的な解釈に対して、H. Cherniss<sup>8</sup>そして藤澤<sup>9</sup>は、それが批判に十分応えるものではないことを認める。類似という関係自体は、一方が他方に似ているなら他方は一方に似ているという双方向的で対称的な関係であることは動かないからだ。彼らは範型と似像との間に「似ている」という点での対称的関係が成立することを認めたいので、別の点にアイデア論批判の無効性を見出す。すなわち類似性を承認する命題(1)から「互いに相似しているものは、同じひとつのものを分有していることが必然」という命題(命題(2))を帰結させたことが不当なのだ。藤澤の言葉を借りれば「原物と似像とが互いに似ているとしても、それはけっして両者が同じ資格でも一つのもの分有しているからではなく、ただ単純に、後者が前者(原物)を模した似像であるという事実によること」である。要点は、類似性の成立根拠にあると言えるだろう。つまり、範型と似像との間には(対称的)類似関係が成立したとしても、その類似関係は何かを共に分有することによって成立するわけではないのだ。モナリザとその肖像の類似関係は、肖像がモナリザに似せられて描かれたというそのことによるのであり、両者が第三の何かを分有あるいは共有するからではない<sup>10</sup>。範型—似像の間の類似関係を、ある同一のもの分有に置き換えることはできない。したがって、藤澤らによれば、プラトンは上記の命題のうち(2)を認めていないことになる。

小池もまた、藤澤らと同様に、アイデア論を擁護する論者の用いる「非対称的類似」という概念が論理的に不透明だというG.E.L.Owen<sup>11</sup>らの指摘自体には同意している。しかしこの指摘に対して応答するために小池が採ったのは、藤澤らとも異なる途だった。すなわちプラトンは(アイデア論における)範型—似像関係がそもそも類似関係であることを否定しているというのである。この解釈は、『パルメニデス』でのアイデア論批判を構成する上記の命題のうちどれをターゲットとするものだろうか。小池自身はこのことを明言せず、命題(2)にこだわって論点を表現しているが、理論的には——伝統的なアイデア論擁護論者とは異なった意味においては——命題(1)に問題点を検出していることになる。そもそもアイデアとそれに対応する(つまりその像である)感覚的事象との間に類似性を持ち込んで理解することが誤りなのだ。

---

8. Cherniss 1957. Chernissはこの論文で、アイデア論批判が有効と考える論者たちの論点を考慮し自分自身の従来の見解を修正して新たな応答を提示した。

9. ここでは主として藤澤 1998 を参照する。

10. もちろん、アイデアの自己分有もプラトンの受け入れる見解ではない。

11. Owen 1953.

藤澤と小池の相違点は明白だろう。藤澤は範型と似像との間の類似関係を認めたくて、それを何かの分有関係に依拠させそれと置き換えることを拒否する。他方小池は、範型と似像の関係が類似関係を含むこと自体を拒否する。

8 いずれの解釈が説得的だろうか。——ここから先は、各自が自分の眼でプラトンのテキストを読み、考えるべきことだ。ここでは、そのために参考となるであろう事柄を書き留めておく。

『パルメニデス』でのアイデア論批判に対するプラトンの応答が範型—似像関係から類似性を剥奪することにあつたという解釈を論証するためには、あらためてこの著作の議論を綿密に参照する必要がある。藤澤の解釈が『パルメニデス』の当該箇所がどう読まれるべきであるかを鮮明に示しているだけに、小池の解釈も、命題(1)を問題発生<sup>12</sup>の根であるとプラトンが考えていたことを『パルメニデス』の当該テキストとの関連からさらに明確にする必要があるだろう。

なお、アイデア論批判を記述する当該の箇所には、事情をさらに複雑にする少し厄介な問題が含まれていることにも注意しなければならない。これまで前提としてきたアイデア論批判の理解は、上記の命題のうち命題(2)のもとになったテキスト132d9-e1 Τὸ δὲ ὅμοιον τῷ ὁμοίῳ ἄρ' οὐ μεγάλη ἀνάγκη ἐνὸς τοῦ αὐτοῦ εἶδους μετέχειν; のεἶδουςを、H. Jackson<sup>12</sup>にしたがう論者のように削除するか、あるいはプラトンの意味での(超越的)アイデアの意味ではなく何らかの性格・性質を表わすと解釈してきた。小池の場合も、後者の解釈を採り、「互いに似ているものは同一の性格 (eidos) を分有する」とこの文を訳している。

しかし現在では、これとは大きく異なる解釈も提出されている。Allen, Schofieldら<sup>13</sup>は、εἶδουςを削除せずプラトンのアイデアを指す表現として読み、さらにここでの批判は、アイデア一般についてではなく〈類似〉のアイデアをめぐるものであると解釈する。この解釈によれば、ここでの批判は次のような命題から構成されている。

- (1)ある何かがある特定のアイデアに似ているなら、アイデアもその何かに似ている。
- (2)\* 互いに相似るものは、ともに同じ一つのアイデアを分有している。
- (3)\* 両者に分有されているのはまさに当のアイデア、すなわち類似のアイデアである。

あるアイデアとそのアイデアを分有するものは類似関係にあり、それゆえ(2)\*によって類似のアイデアを分有する。ところがそれらが類似していることの原因を当の〈類似〉のアイデアに求めることは、アイデアが自己分有しないという基本前提(これは伝統的解釈も受け入れる)ことに反する。したがって分有されるのは別の〈類似〉のアイデアでなければならない。この操作を繰り返すことでやはり無限後退

---

12. Jackson 1882.

13. Allen 1983; Schofield 1996.

が生じる……。——この解釈にしたがうなら、ここで問題とされているのは、アイデア一般ではなく、〈類似〉のアイデアという特定のアイデアをめぐる問題である。

新しいタイプの解釈は、現在では支持者を獲得しつつある。もしも藤澤や小池のように、伝統的な理解にしたがうとしても、新しい解釈について批判的な吟味が必要だろう。

9 もう一つ注意点を付け加えよう。これまで範型—似像関係と読んできたアイデアと感覚的事象との関係は、実際にはきわめて多様な言葉で表現されている。たとえば、「似像」を表わすと考えられる語彙には、名詞だけにかぎっても *εικών*, *μίμημα*, *ὁμοίωμα*, *εἶδωλον* などが使用されており、それに関連する動詞的表現も使われている。また『パイドン』のように、「(アイデアと) 同じようなあり方でありたいと望んではいるが、しかし欠けるところがある」といったフレーズもアイデアの似像とであることの表現として理解されるだろう。問題は、このような語彙群から「似ている」「類似性」の意味を小池のように分離できるかどうか、という点だ。藤澤が小池の主張を受け入れなかった——小池によれば、『西洋古典学研究』の当該論文のページに「無理、無理」と書き込まれていたという——のは、この点での分離が困難であることを重要な理由の一つとしていた。なるほど藤澤の主張するように、これらの語彙の意味から「似ている」という意味を抜き去ったかたちで使用することは、むずかしいかもしれない。

ただし小池に少し加勢することもできる。たとえば、これらの語彙のうちで *εικών* について、アリストテレスもある文脈では「似ている」ということよりも「像である」ことを基本として理解しているように思われる。アリストテレスは、記憶と記憶されたものとの関係をパンタスマ(表象されたもの)という魂のある状態に依拠して説明した。彼はこのパンタスマがそれ自体として内容をもつが、同時に何かの記憶でもあることを指摘し、前者を絵画であること、後者を何かの像であることに喩えて説明している。何かの(of-ness)像であるという概念を表わすのは、*εικών* という語彙だった。

10 しかし、このアリストテレスの議論を参照することは、像の概念をめぐる重要な問題へとあらためて注意を促す。すなわち、像という概念の生成論的な性格である。すでにKaplanの議論が示唆していたように、像が像として、すなわち何かの像として成立するためには、その生成のプロセスにおいてモデルとなるものと適切な因果関係——それをモデルとして描くことなど——にあることが要請された。アリストテレスも、(絵画と区別される)像にはそのような生成論的な性格が伴うことを示唆している。したがって、似像を表わす語彙群が類似性でなく像性を基本的に意味とすると解釈するための有力な方途は、その理解にある種の生成論的な性格を読み込むということだろう。たとえば模倣物あるいは写しを意味する *μίμημα* については、それがモデルとなるものを真似る、模倣するという活動 (*μίμησις*, *μυμείσθαι*) を通じてつくられる、という局面に着目して理解するのである。

だが、これは小池のたどった途ではなかった。小池によれば、プラトンによって遂行された類似性の分離はそのような仕方でおこなわれてはいないのだ。小池はより困難な「アイデアへの途」を選んだのである。小池の足跡をたどろう。

### III

11 繰り返すが、小池がこの第七章で意図したのは、『ソピステス』において範型—似像関係から類似性を分離するという作業が行われているということを示すことにあった。小池によれば、その分離作業はこの対話篇の最終局面において、言表（ロゴス）の真および偽であることを確立する場面で遂行されているという。

問題となる箇所は対話篇全体の議論の成果を集約している。そのため小池も、この対話篇が提示するいくつかの解釈上の問題に対する応答を積み重ねながら考察を展開している。その考察には、類似性の分離という問題とは独立に考えてもきわめて重要な指摘が含まれている。たとえば、小池は、この対話篇における「虚偽のパズル」は(i)あらぬものがあることは不可能、(ii)言表（判断）はあらぬを分有しない、と二通りあり、最終場面で問題となるのは(ii)のパズルであること、すなわち「偽言表の成立を阻む正面の障壁は、「あらぬものがある」というテシスによっては微塵も動揺することのないソフィスト最後の城塞」であることと指摘する。これは、それまで明確に理解されてこなかった（そして残念ながら小池の論文の発表後も必ずしも十分に理解されたとはいいがたい）が、この対話篇の構造についての重要で正当な見方である。だがいまは当面の主題についての小池の議論を追わねばならない。

この肝心な点についての小池の議論は、率直に言って、わかりやすいとは言えない。ただしこの場合の難解さは、小池のスタイル（文体）のせいではないだろう。小池の文体は、たしかに人に懇切に教え諭すというタイプではないが、よく読めば十分に理解可能である。しかしここには、異質の難解さがある。それは論じられる問題とそれに対する小池の応答の両方に由来すると思われる。

12 小池はまず、「言表はそれが表わす事態から剥離されない」という認識から出発する。すなわち、

言表TP [「テアイテスは飛んでいる」という言表] は〈飛んでいるテアイテス〉の出現であって、「坐っている」テアイテスとの関係づけを拒む。言表TPは偽ではない。(第七章p.195)

したがって「テアイテトスは飛んでいる」(TP)という言表も、「テアイテトスは座っている」(TK)という言表と同等の資格で真である。小池が注意するように、このような見方においては、言表TPとTKが表わすのは独立の事態である。

ここから出発して、言表が〈あらぬもの〉とまじわることが論証される。論証の鍵となるのは、言表が何かにかかわるということ、何かについての言表であるということ (τινὸς λόγος 262e5; περὶ οὐτ' ἐστὶ καὶ ὅπου 263a3) である。いま二つの言表TPとTKについてそれがかかわるもの、それは「「テアイテトス」であると問答の場で確認された」。これによって、一方が真、他方が偽という性格をもつと承認される。なぜなら、このテアイテトスという「リンケージによって両者は、同じものについて異なることを語っていることが明白になった以上、いずれかは偽でなければならない」(p.198)からである。

こうして言表の真偽の弁別は、問答の場において主題を確定すること、そして同一の主題についての「相異なる真理主張から「異なるものが同じものとして語られる」偽言表への立証への過程である」と解される。ただし、同一の主題である「このテアイテトス」とのかかわりは、言語外的事实として存在するテアイテトスへと抜け出ることではない。

ここで問答の場における主題の確定とは、しかし、もともと事態の地平に存在する二人の発話者の間で交渉がなされるから、主題が言語外対象として指示され言葉に対峙する事態へと目が向けられる、ということでは全然ない。主題の外化は、問答装置としての言表の依然その内部における分離である。言表と言表から独立な事実・事態との分岐点はその中には見えていない。事態の地平がそれ自体として出現するのは、あくまで偽言表の成立をまって言表の像性が確立されたことである(第七章p.199)。

TP, TKという二つの言表は、同一の主題にかかわることの承認を通じて、言語外的事態に照らし合わせることなく、少なくとも一方が偽であることが導かれている。そしてその主題の同一性の確認は問答という場を通じてはじめて遂行される、というのだ。

以上の解釈には、小池独特の鋭い知見が織り込まれており、きわめて刺激的である。たとえば言表の真と偽の区別の成立こそがそれがかかわる世界あるいは事態の存在を導くという考え方は、D. Davidsonに類似した思考を確認できるかもしれない、興味深い見解である<sup>14</sup>。しかし、多くの点で異論も予想される。とりわけ、小池はTPが偽言表、TKが真言表ということは、(登場人物ソクラテス

---

14. たとえばDavidson 1983を参照。

が)「それを明言していない、というより明らかに避けている」と指摘するが、「テアイテスは飛んでいる」という言表(TP)が偽であり、「テアイテスは座っている」(TK)が真であることはほとんどすべての解釈が自明の前提としてきたので、抵抗は大きいだろう。たしかに当該箇所ではTPが偽だと明言されてはいない。しかし多くの論者は、それは偽であることがあまりにも明白だからだ、と応ずるだろう。

もしそうであったとしても、言表の「主題の外化」という観点の重要性についての小池の指摘はいぜんとして適切であると思う。そして小池のいう「主題の外化」、すなわちロゴスが何かの、あるいは何かについてのロゴスである、という論点には、たしかにある種の真理の対応説を拒否する思考が含まれているという点についても、私は同意したい。ただし、そのことに関連して以下に述べる私の理解は、小池とは解釈の方向は少し異なるだろう。つまり、ここで示されるロゴスの理解は、心の内部で表象その他の心的アイテムの連合(その意味での命題)を形成したうえでそれを外的事物に照らして真偽性を問う、という思考を拒否するものだ。この箇所ではドクサ(判断)およびパンタシアー(ここでは知覚判断)の真偽性に先行して言表(ロゴス)の真偽性が問われ、そして言表が何かにかかわって成立することを通じて言表の真偽性が確立される。ドクサなどの心的事象の真偽性は、この言表の真偽性に依拠して弁別されている。このように真偽性の弁別の基礎にある言表は、何かについて、というかたちで外部へとかわることによってはじめて言表という資格を得るのだ(262e5-6)。これは、まさに言表が本質的に伴っている of-ness の指摘であり、言語の志向性についての重要な洞察であると、私は(ハイデガーとともに)受けとめている<sup>15</sup>。

13 しかし、小池がこの章で達成しようとしたこととの関係で何よりも問わねばならないのは、言表の真偽の弁別と言表の像性との関係である。なぜ言表の真偽の区別の確保が、小池の主張する言表が像であることを導くののだろうか。なるほど言表に真偽の弁別が成立することが、言表が「事態の地平」と関わること、その意味での言表の of-ness を導くかもしれない。だが、そこから言表が何かの像であることは帰結しないように思われる。そもそも言表が何かの像であるとはいかなることを意味するのだろうか。

小池自身は、「言表が像としての存在論的身分を獲得するというとき、世界もまた描像の外にないとするれば、像の概念そのものが破綻しないか」と自問した上で、次のように応答している。

---

15. この点について、私は中畑 2011a の第 V 章において、言語の志向性という観点から考察を試みた。その章の末尾で引用されているハイデガーの『ソピステス』論での考察も参照。

像性をそれ自体としてとらえ、アイデア（原範型）への途筋をつけることは、したがって、もともと事態と剥離されないロゴスの自己異化の動きに沿って、その異化運動が像と原範型に転置されるという形でしか語れない。（第七章p.200）

ここで小池が強調しているのは、言表が像であるということがあらかじめ定まった事態ではなく、問答の遂行と真偽の弁別という運動——さらに小池はこれが全体論的な性格をもつことを主張している——のなかではじめて確立されるということだろう。「像の本性は、・・・外部への動勢ととらえることができよう」と小池は言う。ここには、範型—似像関係を探究というエロスの指向に即して理解しようという小池の一貫した理解をあらためて確認できる。そして同時に、そのような理解を言表の真偽性と対話的プロセスとの関係というかたちでさらに展開しようとする重要な試みを見てとることができる。

それでも、いぜんとして次の問いは残るのではないか。言表の真偽性の弁別、そしてその意味での「ロゴスの自己異化」「外部への動勢」は、なぜ、どのような意味で「言表の像性」すなわち言表が何かを範型とした像や写しであることを導くのだろうか。

小池に直接問いただすことができれば、どんな応答が返ってきたらだろうか。もしかすると、その答えは、すでに『アイデアへの途』のなかで与えているというかもしれない（おそらく第六章をよく読み直す必要があるだろう）。あるいは、そのように問う側の像の概念を再考することを求めたかもしれない。いずれにせよ、小池の提示した課題を、彼の不在という事実を痛感しながらも、自分自身で考えることがわれわれ遺された者たちの課題である。

\* \*

私は、ソクラテスとプラトンについて最近書いた案内的な文書<sup>16</sup>のあとに、参考文献を挙げることを求められて、プラトンについての研究書としては小池の本だけを挙げて、次のように書いた。

小池澄夫『アイデアへの途』京都大学学術出版会 2007年

日本語で書かれたものだけでも研究書は数多く、枚挙にいとまがないので、ここでは少しの個人的な想いも含めて一冊だけ紹介することを許してほしい。著者は、私の大学時代の（そして偶然にも中学と高校の）先輩であり、私が本章を執筆しているころ——二〇一一年春——に亡くな

---

16. 中畑 2011b.

った。これは彼のプラトンに関する論文集である。独特の文体は読みやすいとは言えない。私自身その論旨に必ずしも賛成できるわけではない。しかし、プラトンを読むことを通じて自ら考えるということ、つまりプラトンが望んだようにその著作を読むということの、ひとつの具体的な形が確実にここにはある。

これまでの考察を通じて小池の歩んだ「アイデアへの途」を私なりに再訪したいま、この紹介に間違いはなかったとあらためて確信している。

## 引用文献表

- Davidson, D. 1983, 'A Coherence Theory of Truth and Knowledge.' In Henrich, D. ed., *Kant oder Hegel?*, Stuttgart: Klett-Cotta: 423-438; repr. in Davidson, D. 2001. *Subjective, Intersubjective, Objective*. Oxford: Clarendon Press.
- Goodman, N. 1955. *Fact, Fiction and Forecast*. Cambridge: Harvard University Press.
- . 1968. *Languages of Art; an Approach to a Theory of Symbols*. Indianapolis: Bobbs-Merrill.
- Hackforth, R. 1955. *Plato Phaedo*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackson, H. 1882. 'Plato's Later Theory of Ideas: II: *The Parmenides*.' *Journal of Philology* 11: 287-331
- Kaplan, D. 1969. 'Quantifying in.' In Davidson, D. and J. Hintikka, *Word and Objection: Essays on the Work of W.v. Quine*. Dordrecht: D. Reidel: 178-214.
- Owen, G. E. L. 1953. 'The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues.' *Classical Quarterly* 3:79-95; repr. in Allen, R. E., ed. 1965. *Studies in Plato's Metaphysics*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Schofield, M. 1996. 'Likeness and Likenesses in the *Parmenides*.' In Gill, C. and M. M. McCabe eds. *Form and Argument in Late Plato*. Oxford: Clarendon Press: 49-78
- 中畑 正志 2011a. 『魂の変容——心的基礎概念の歴史的構成』 岩波書店
- . 2011b. 「ソクラテスそしてプラトン」 神崎繁, 熊野純彦, 鈴木泉編 『西洋哲学史 I』 講談社
- 藤澤 令夫 1998 『プラトンの哲学』 岩波書店
- 藤澤 令夫・渡辺慧. 1979. 「科学の知と哲学の知」 『中央公論』 94巻9月号: 188-199.
- 渡辺 慧 1978 『認識とパタン』 岩波書店